萬葉拾穗抄

六

萬葉集巻第六

雜歌

養老七年癸亥五月幸芳野離宮時作歌一首并短歌

笠朝臣金村

上之御舟乃山亦水枝指四時亦生有乃我乃樹能弥継嗣亦萬代如是二二知三三芳野之靖跡乃宮者神柄香貴將有國柄鹿見欲將見山川乎

清之神代從諸之多藝津白波之不斷毛不盡毛幾久毛有巨勢乃浜乎

反歌

如是耳有跡曽見壮鹿三吉野乃清河内之多藝津白波

毎年謂之等之乃波落多藝追山白三白木綿花

不飽香聞

神柄加見欲賀蓝三吉野乃滝乃河内者雖見不飽鳴

三芳野之秋津乃川之萬世尓
ちとせの秋はみ川乃よろつよに
断事無 又遷将来見
しゆるこゝろもあるへくもあらん
泊瀬女造 木綿花 三吉野
そゝけせめ乃ちはるゆくとなるらめ
瀧乃水涙 関ゐ関事来 受屋
しきり乃ちおとふ乃ちまてしすやは

一首并短歌 等月次審然 以レ類載レ於レ此

車持朝臣千年

味凍 綾毋之敷 鳴神乃
うちとろ乃ういやふとろ〳〵ある神の
音耳聞師 三芳野之真木立山陽
なるの乃ちしきりしとゆ

見陣者 川之瀬毎 来
朝霧之 夕去者 川津鳴 ともし奈共詳
紙不解 客之 有者あれは吾耳為而
ひしこゝろすゝしこひみ あるへわなみて
清 川原乎 見良久之 惜蒙
やこよきこゝろを

反歌

瀧上乃 三船之山者 雖レ畏
瀧乃上のみねの乃ゝ口こゝろ
思 時毛日毛 無
おもひこゝろもしもなけれ
千鳥鳴 三吉野川之音成
ちとりなくみよしの川乃音のみけみ
止時 無 二所思君
やむときもなくおもほゆるかも
落 刺日 不並 二吾戀
あのねさす日をしへわれ恋

吉野之河乃霧丗立而
弥益々所念可聞

神龜元年甲子冬十月五日幸
紀伊國時作歌

山部宿禰赤人

安見知之和期大王之常宮等
仕奉流日鹿野由背上介
清波瀲尓
奥嶋
風吹者白浪尓和伎潮干者
奥嶋荒礒之玉藻潮干滿
伊隠去者所念武香聞
芦邊乎指天多頭鴨渡
神龜二年乙丑夏五月幸芳野離宮之時作歌三首并短歌

笠朝臣金村

玉藻苅管
吉野
神代従然尊
奥嶋荒礒之玉藻潮干滿
伊隠去者所念武香聞
芦邊乎指天多頭鴨渡

みやまもさやに 御山毛清 落多藝都
吉野山を清きとなめし 芳野川之 河瀬乃淨 平見
ゆく川乃せのきよきを見 數鴨
ますとの賀ふ 者上邊者千鳥
邊者 河津都麻喚 百磯城乃
大宮人毛 越乞 尓思自仁思有 者
大宮人も おもこちよ きやまあれ
毎見 文冊 乎
見るごとに 玉葛
絶事 無 萬世尓 如是霜
願跡 天地 之
かくあめつち乃 神平曽 禱
恐 有 等毛
かしこくもあるか

よろづたえんと
思ほしめして
大宮人乃 いつもいつも
こころえたまひ 賀ほこり
たまひし
反歌
萬代 代
よろづたえんと 見友 將飽 八 三芳野乃
多藝都河内之大宮所
こころにもあるかも
人みな乃 皆乃 壽 毛 吾冊 三芳野乃
多吉 能床 磐 乃常 有沼鴨
山部宿禰赤人

八隅 知之 和期大 王 乃 高 知為
芳野 宮 者 立名 附 青
垣隠 河 次 乃 清
河内 曽 春 部 者 花

嘆平遠里秋去者霧立渡
さきさわたり秋されば雲居雁鳴
其山之彌益々介此河之
うつの山乃いやますくかうつのほの乃
絶事無百石木能入
よろづよまでにくりかへしつゝ
宮人者常将通
ひとねもよろし

反歌

三吉野象山際乃木末尓波
みよしのゝきさの山のこすゑにハ
幾許毛散和口鳥之聲可聞
いくばくもちりわくとりのこえのきこゆる

鳥玉之彼乃深去者久木生留
うたまくの彼の深きに去者久木生留
清河原尓知鳥數鳴
きよきかはらにちどりしばなく

安見知之和期大王波見吉野乃
やすみしゝわごおほきみハみよしのの
館津之小野笶野上者跡見居置
たつきの小野のゆきのゝへハあとみすゑおき
而御山者射圓立渡朝獵
てみやまにハいこまだちわたりあさかり
尓十六騎起之夕狩尓十重踏
にしかも五百騎おこし夕かりにかさねふみ
立馬並而御狩曽立為
立馬並而御狩曽立為
春之茂野尓馬並而
はるの茂野に馬なめて

反歌

足引之山毛野毛御狩人
あしひきの山にも野にも御狩人
得物矢手挟散動而有所見
えものやたばさみさわきてあるらしも

冬十月幸二難波宮一時作歌三首

よくあつる夫を云
也得物夫とうけりさ
そさみとハ二つとミるよ
まそさみぬきてゐる
を云 玉篆 君の御手ハ
御物人と持へきも云
をしてるや あふみの
喜撰式ニ海を押照と
云湖をかほてるを云ニ
奥儀抄用之云れども
日本紀釋云推出也難
波之埼如推出也或曰
欲讀難波之發語之
玉篆 万葉發語説めり
芦垣乃ふりにし里
古へみハ芦垣をとり

笠朝臣金村
并短歌

忍照難波乃國者葦垣乃
おしてるやなにはのくには芦かきの
古郷跡人皆之念息
ふりにしさとゝ人みなのおもひやすみて
而都礼毋無有之間介
つれもなくありしあひだに
績麻成長柄之宮介真木柱
うみをなすながらのみやにまきはしら
太高敷而食國平治
ふとたかしきてをすくにをおさめ
賜者奥鳥味經乃原介
たまへばおきつとりあぢふのはらに
物部乃八十伴雄者廬為而
もののふのやそとものをはいほりして
都成有旅者安礼十方
みやことなせりたびにはあれども

ふりにしさとハなにはハ仁徳帝の旧き古京と成故也
おもひやすみて おもひすてゝの心
つれもなく 何の縁もなくありしあひだといふ也
うみをなす ながらの 先安云長柄乃宮の枕詞うみをなすといへる也
はしらの 長柄宮にこそ離宮にてこそあれ
をすくにを 食國と云 帝乃しろしめす國の心 日本紀ニ食國ヲシクニと読
おきつとり あぢふ 枕詞 味むらハ沖にすむ故也 味はむら鳥と云也
味經原 此の原の名所也 奥より渡る鳥の味むらといふ此離宮を云なり
もののふの 八十伴の男也 玉篆 釋日本紀 八十部ヤソトモノヲとよめり
いほりつゝ 話臣乃居を仮りて都となせり
此乃離宮ありしと云るにて
旅なりハあれども也と云也

反歌

荒野等丹里者雖有 大王之
あらのらにさとはあれどもおほきみの
敷座時者 京師跡成宿
しきますときはみやことなりぬ

あらのら 荒野等ハ小里ハあれども
あれたる野らにして此里之味經原を
云者也 亦去あ心同

あまをとめ棚なし小舟
童蒙抄云ふなたなとも
うらうへのふなはりなき小舟
をも棚なしと云艜と云り
これはたなき小舟と也
いさなとり浜へを
いさなとは海ゐの枕詞
ちへに波よせ波の数
おほくよするを云
いそへも同意
へつ波へは邊の心は
ハ助字也
ましくしく ましく
しきりにと也
月にけに日にけにと同
今のみにあかめやも

海未通女 棚無小舟 榜出良之 客乃屋取尓 梶音所聞
あまおとめたなゝし小舟こきつらし たひのやとりにかちのおときこゆ

車持朝臣千年

鯨魚取 濱邊乎清三 打靡 生玉藻尓 朝名寸二 千重浪縁 夕菜寸二 五百重浪因 邊津浪之 益敷布尓 月二異二 日日雖見 今耳二 秋足目八方 四良名美乃 五十開迴有 住吉能濱
いさなとり はまへをきよみ うちなひき おふるたまもに あさなきに ちへなみよせ ゆふなきに いほへなみよる へつなみの ますますしくに つきにけに ひにひにみれと いまのみに あきたらめやも しらなみの いさきめくれる すみのえのはま

今のみとくいふなりと也
はにふと云也日本紀ニ其於秀起浪穂之上ニハ岬字
きしは波のちくよ
又按云はにふハ土也
にほひてハあらひてゆ
くるまでと奥はゆける
こゝろし
あめつちのとほきかことき
ひと同時の義也大王の
みけをいだしせよつる乃
長き事すまりと云
みくにゝ食國と同
又按云帝王乃供御を
備ふる國也王東淡路を云
いさみち あまらの意
おきついくり日本紀十二ゆ

反歌

白浪之 千重来縁流 住吉能 岸乃黄土粉 二寳比天由香名
しらなみのちへにきよする すみのえの きしのはにふに にほひてゆかな

山部宿祢赤人

天地之 遠我如 日月之 長我如 臨照 難波乃宮尓 和期大王 國所知良之 御食都國 日之御調等 淡路乃 野嶋之海子乃 海底 奥津伊久利二 鰒珠 左盤尓
あめつちの とほきかことく ひつきの なかきかことく おしてる なにはのみやに わかおほきみ くにしらすらし みけつくに ひのみつきと あはちの のしまのあまの わたのそこ おきついくりに あはひたま さはに

潜出松並而仕奉之
かづきさてわれおめて
貴見礼首
うこそ子忍れて

反歌

朝名寸ニ堀吾所閑三食津國
野嶋乃海子乃船二四右良信

三年丙寅秋九月十五日幸播磨國印南野ニ時作歌二首并短歌

笠朝臣金村

名寸隅乃松瀬從所見淡路
島松帆乃浦ニ朝名藝尓玉
藻苅管暮菜寸ニ藻鹽焼
煙夕立見尓所見
海未通女有跡者雖聞見尓
将去餘四能無ク者大夫之
情者梨荷手弱女乃念多和
美手徘徊乍吾者衣漏流
船堀江名三

反歌

藻苅海未通女等見尓将去
船堀江毛欲得浪高
雖見飽奴隅乃
磯廻

船瀬之濱（於四寸流思良名差）
みおせりなきたゝまくもゆゝしきかも

山部宿禰赤人　隨

八隅知之　吾大王乃　神
やすみしゝ　わかおほきみの　
高所知　流　稲見野能　大海乃原笑
たかしらす　いなみのゝ　おほうみのはら
荒妙　藤井乃浦尓　鮪釣　等
あらたへの　ふちゐのうらに　しびつると
海人舩散動　鹽焼　等人
あまふねさわく　しほやくと
有浦乎　吉美　宇倍毛　釣
ありうらを　よしみ　うべも　つる
者為濱乎
ものはまを
往来　御
ゆきかよひ　みる
吉美　諾毛　鹽
よしみ　うべも　しほ
燒　蠑　等
やく　あまと
白濱
しらはま
清
きよき
見　母　知師
みれも　しらし
不飽
あかぬ
浦
うら

反歌

奥浪　邊波　安　美
おきつなみ　へなみ　あみ
藤江乃浦尓　舩　泊　為登
ふちえのうらに　ふね　とめ　せと
不欲見野乃　淺　茅　押　靡　左　宿　夜之
あかぬのの　あさぢ　おしなべ　さ　ぬる　よの
氣長　有　家之　小篠生
けなが　あり　けるし　ささはら
明方　潮　干乃道乎　従明日　者
あけかた　しほ　ひの　みちを　あすより　は
下咲　異　家　近　附　者
したゑみ　け　いへ　ちかづき　ぬ

おきつもの　へなみ　さわく　
仙宿乃浦廻乎　榜舟乃　
しらすのうらみを　こぐふねの
梶音乃　
かぢのおとの
不聞日　
きこえぬひ
奈久
なく

過辛荷島時作歌一首并短歌
（過辛荷島＝カラカノシマヲスギ）

過辛荷島

仙日播磨國風土記曰韓荷島韓人破船所漂之物就於此島故云韓荷島是又曰古点叫乃美島也

八雲立出雲八重垣妻籠尓八重垣作其八重垣乎

詞椿云あちこちさりに詞椿云あちこちひうまつさゝ

いもがあたりをみつゝ

見安云いもがあたりをみつゝ

我かりつゝ

重之点ハりつゝ

いもといひく雖忘ぬ心やまく松浪の重なる人ハわすやぞをれハ

山部宿祢赤人

味澤相妹目井乃不數見而敷布乃袖可反而今夜毛加将宿

韓荷島韓人破船所漂之物就於此島故云韓荷島是又曰古点叫乃美島也

八雲立出雲八重垣妻籠尓八重垣作其八重垣乎

詞椿云あちこちさりに詞椿云あちこちひうまつさゝ

いもがあたりをみつゝ

見安云いもがあたりをみつゝ

我かりつゝ

重之点ハりつゝ

いもといひく雖忘ぬ心やまく松浪の重なる人ハわすやぞをれハ

万六 十

味澤相妹目井乃不數見而敷布乃袖可反而今夜毛加将宿

山部宿祢赤人

うちさりにいしろめたしつゝ而敷布乃袖可反而今夜毛加将宿

細乃枕毛不巻櫻皮纏

きよ乃枕もまかすつゝみてやもさ

流舟二真梶貫吾榜来

作者淡路乃野島毛過

いもあれとみちの

智奈美嬬辛荷乃島之島際徙

あをやまに辛荷乃島之島際徙

吾宅平見者青山乃曲許十方

不見白雲毛千里尓成来沼

許伎多武流浦乃盡

徙隠

島崎隈毛不置憶邑

吾来客乃氣長尓

わかこゝろ

反歌

藻苅辛荷乃島尓島廻為流

水鳥二四毛有我家不念有六

島隠吾榜来者毛

矮邊上真熊野之船

風吹者浪可将立伺候尓

都太乃細江尓浦隠居

過敏馬浦時作歌一首并短歌年月未詳
（類載此也然歟）

山部宿禰赤人

御食合　淡路乃島二　直向　三犬女乃　浦能奥部庭　深海松乃　見巻欲　浦廻庭　名告藻乃　名惜三　間使　不遣而　吾着衣乃　名二負　友妻二　生友奈重二

反歌

海人之鹽焼衣　乃奈礼名者香　為間乃　一日毛君乎　忘而将念

四年丁卯春正月勅諸王諸臣子等散禁於授力寮時作歌一首并短歌

神亀四年正月数王子乃諸臣子等集於春日野而作打毬之楽其日忽天陰雨雷電此時宮中無侍従乃侍衛勅行刑罰乃官皆

見巻欲　跡莫告藻之　己名惜三　間使不遣而　吾着衣乃　名二負　友妻二　生友奈重二

為間乃　一日毛君乎　忘而将念

四年丁卯春正月勅諸王諸臣子等散禁於授力寮時作歌一首并短歌

神亀四年正月数王子乃諸臣子等集於春日野而作打毬之楽其日忽天陰雨雷電此時宮中無侍従乃侍衛勅行刑罰乃官皆

散禁於校刀寮二而妄不得出ル
道路二千時悃憤ノ即作二此歌一ヲ

作者未詳

真葛延　春日乎　山者打靡
春去往　跡山上櫻田名引
寿左右裳　許乃鷺鳴　沼物
高圓尓　聲之聞者　部乃
八十友能壮者　打不四曳
之来継　物尓有者
皆石　此　常丹有者
皆一　續　友名
目而　遊　物尾
益里平待難　丹　吾為　春平
決　巻毛　綾尓恐
言

皆依ひ往ん物を
皆一のしいゆゑ
友無せ鳥
ゆゑ切
待てふわりて
ひく杜んこ待ち
彼待擬の鳥
て見乃例
いとくもゆゑ
ゆゑ
ことを
しめりそ

巻毛　湯ゝ敷　有　跡　豫
川丹　石二　生　菅　根取而　之努布
兼而　知　者　千鳥鳴　其依保
草　解除而　益平　往水丹　稜
而益平　天皇　之御食恐
百礒城之　大宮人乃　之玉鉾之
道　毛不出　比日
戀

反歌

梅柳　過　良久　惜　依保乃内尓
遊　事平　宮　動動尓

950 951 952 953 954 955

茨乃根乎宇倍母伎麻久流　茨ぬきあで愛し根をこそもきまくること
妻と言ひしく　あの子のすと　母のなれいそ　の泥打ちそくえ
うめ柄と　とらくのみ　佐保乃内に　彼春日野よ　打越の　柳ひせ　とうめ
柄乃風さ　吹て　春日野う　越ひく　えゆき　強動す　浄こうめふ
うひしこそ　といる　多く

おおきみの　さつかひ

五年戊辰幸難波宮時作歌四首

笠朝臣金村一云車持朝臣千年

山乃堀を　宮ゝめて　山当を　大王之　界賜　跡山守　居
とすへて　おおきみの　さつかひ　云ふこと　聞者　尓
あるらし　すへやま　守云　山尓　不止
じこゝろ　思ひ　こゝろ　見渡者　近物　可良　石隠
乏しさ　乏しさ　あわ　乏せいちろき　あわ　不見
足安云々　玉ふ　加我欲有　珠平　不取
波ふ〳〵　貝の　拾取　ふいりの　乏しさ
潟林　かふいりの　ちる　ふ　こゝろ
ちる　ふ　こゝろ　轉衣　服楢　乃里　之　島待　尓
衣きぬ　乃里　衣きぬ　乃里

キヌノサト　服楢里　ソクラノ　大和添上郡　奥
よきぬ　乃山　云同　玉
ふ　つゝ　落松　衣裏
玉　つゝ　寶珠　もの　ふ
を分る　ふたりゝ
衣と　松須小壮　鹿　之
書立鹿　宿　日
しふ　人　あり　や
んと　約　従駕　乃
立乃　うま　ふ
ゝ　ふ　ふ
屋　ゝ　ふ　山能
越　ふ　あり　思
より　ゝ　ゝ　類
聚万葉　大和越　ふ

玉手師付、牟好人欲得
牟壮鹿之鴻奈流山半越将去
日谷八君當不相将有

一首　年月未審然尓以歌類載此

勝王

朝波海邊尓安左里為暮去者
倭部類鴈四之
佐保能山平者思哉毛君
仙さ竹之大宮人乃家師住

一首

大宰小貳石河朝臣足人
さゝ竹乃大宮人や

ゐく行乃なかや人乃 仙宮山寺乃頭の句ともに古語なりよめりとハさす行とハいふさき集十五に作須大氣能大宮人者伊麻毛可毛又挍聖徳太子歌佐須竪新乃岐祢波夜といふもおなし事なり吉野仙宮さす行のふもとなるへし一口訣別かたきなり

家ゝ乃ゝ乃おもしせ家ゝ乃ゝ乃かたゝ人乃かたらひ挍ハしけ乃なすおもふ通すれいもとゐ中小宅家ゝ乃竹を見しゝ挍ともし挍へなすおもさく行いたゞ人の挍ふゝ人の衣とゝむるゝ乃衣さゝのしとゝいなのおもと太宰府ゐく旅人つゐうゝさゝ君いまし次ゐて和の奇ゝく

やすみしゝわかおほきみ 帥大伴卿 和歌一首

普天乃下皆王地奈礼八加 吾大王乃 御食國者 八隅知之 日本毛 此間毛 同 登曽念

冬十一月太宰官人等奉拜香椎廟訖退歸之時駐馬于香椎浦各

述懐作歌三首

帥大伴卿

去來 兒等 香椎乃潟尓 白妙之

袖 左倍 所沾而 朝菜採手六

時風應吹 大貳小野老朝臣

許曽尓毛風吹倍久有奴香椎潟

潮干奈 尓玉藻苅而名

豊前守宇努首男人

徒遅 常尓 我見之 香椎潟

後 尓波見 縁母奈思

従明日

前國風土記云到筑前國例先參詣筥嶋宮云々

さゝやらくいさゝの朝菜八多つむ菜

ときつ風吹くらりぬ時風ゝいの潮叫の風や

汭玉篇云水相入貌江文通擬古詩今宿浦陽汭水北曰汭ト

一つもりてなハかなとゐんとゝもつゐ

ゆきくりてもかゝとし

そも日叫の波汭ゐ乃

ゝゝもや又但馬てゐ

京乃ゐとゝもくし

遥思芳野 太宰府ヨリ坂上乃郎女ヲ
ウツルヨリ

こやひものせの
隼人乃瀬戸名ゴ
但之妻ニヤ人ノ武士
乃ヲノクサトヒ
思ニコソ俗境ホ
ソ我離ラル吉野
の滝よ志ノよし
次田温泉 奇ニ湯氣ヲ
ゆのそらゝゝあ
紙書ヨル時ヲ
もこゝひやゝゝ又安
楊原名ヌ
擢駿馬使 よきそらを
えらひて使ス玉篇曰
擢引也抜挙也駿馬
之美称也
おくれにけ
涼山岩ニ苔生ホトヽ
うさもおれいうニ
ヒヌ人序ノホヨ
ハヽこゝもヒ
回シ勅使乃呉乃
ますかけうのや
おるおしちすくるひ
大汝足安ニこわの神
のゝり玉栗山三神ハ
山ヨリ紅皆乃ゝもし山ニ

遥思芳野離宮作歌一首

卽大伴卿

隼人乃瀬門乃磐母年魚走
こやひものせの
芳野之瀧尓尚家里不及
よしのゝたきにもなをさとりけらず

宿次田温泉聞鶴喧作歌一首

卽大伴卿

楊原尓鳴蘆多頭者如吾
ゆふはらにおるのゝたづはわれごとく
妹尓戀哉時不定鳴
いもにこふれやときわかずなく

天平二年庚午勅遣擢駿馬使
大伴道足宿祢時歌一首 勅使
大伴

道足宿祢饗二于卽家一此日會集衆
諸相誘驛使葛井連廣成言須作二
歌詞一之時應
聲即吟此歌
驛使葛井連廣足

奥山之磐尓蘿生恐毛
おくやまのいはにこけむしてのみも
間賜鴨念不堪國
こひまたまふかもおもひあへなくに

冬十一月發二卽家上道一超二筑前國
宗形郡名兒山一之時作歌一首

大伴坂上郎女

大汝小名呼
おほなむちすくなひこなの神こ
名著始鶏目名耳平名児山跡
なつけそめけめ名のみをとゞめ

須而　吾戀之　千重之一重　慰
おひしく　わりこひのひとへのしげ
奈具佐米　七國
なくさめなくに
向京海路見濱邊作歌一首
大伴坂上郎女
吾背子尒　戀者　苦　眼　有者
わりせこに　こひは　くるしも　まなしあれば
拾而　將去　戀　忘
いりてゆかん　こひわすれがひ
冬十二月大宰帥大伴卿上京作
歌二首　大宰帥大伴卿兼任大納言向京上道此日駐馬
水城顧望府家　千時送卿府吏之中有遊行女婦其字曰兒嶋也於
是娘子傷此易別嘆彼難捨而振袖之哥二首

娘子　子嶋
振袖　てもみつれよ
わすれ貝　袖を忘
おきて行
おきてゆかば　おもかたみこそ
大伴坂上郎女
凡　有者　尤毛　右毛　將為乎　恐　跡
おほかるに　さもこそあらめ　かしこけど
振痛袖　而　有　香聞
ふりたきそで　にあり　かもと
娘子　子嶋
雖　然
しかれども
余振　袖　平　無　礼　登　母　布奈
わがふるそでを　なけと　もふな
和歌二首　大納言大伴卿
日本　道乃　吉備乃　兒島平　過而行者
やまとぢの　きびのこしまを　すぎていなば
筑紫乃子嶋　所念
つくしのこしま　おもほえんかも

大文跡念在吾哉水莖之
水城之上尒泣將拭
三年辛未在寧樂家思故郷歌二首

大納言大伴卿

頃更去而見牡鹿神名火乃
淵者淺而瀬二香成良武
指進乃栗栖乃小野之芽花
時尒之行而手向六
将落時尒之行而手向六
ちんとさそうしまそしむろん

神あひの関はやわ大
和とく旅人つ乃故つ郎香まれしあそひてい清くありてこ
さすきのそすれ仙曽さすきいさすく栗栖い栗乃いろされ祖預よ
さすきとをり栗栖のいつ乃さすく心小云勉てく栗栖小野山城とい

如此旅人宿禰思故郷哥十一首并古事記ニ推略奏ひき河のわくそすくこと淡せのふハ
初瀬ま生尼もふまそもや心ハ約ようくて安包くて救ちけ石ひまんこと

四年壬申 元正天皇神亀
四年世子宍害ちまり
四月乃改元前
越然る故詔ちて七道
乃諸司使を
国司乃治功勤怠を見
るおつめちす續日
本紀ま生叫時の
いふへし
也但ま安名部と二郡
沼手ちくこ伊ハ此ま
るくく乃四
行ことる見安云天王
乃警固ニ兼筑紫

四年壬申藤原宇合遣西海道
節度使之時作歌一首并短歌

高橋蟲麻呂

白雲乃龍田山乃露霜尒
色附時丗打越而客行君者
いろつくまてふうちこえていかにそ
五百隅山伊去割見さくく賊守
筑紫尒至
山乃曽伎野之衣寸
見世常伴部平遣之
山彦乃将一應極
谷潜乃

太宰府ニテ九列ノ北遠ヲヤラレ悲ミ作ル歌

山乃宇佐野乃ウキ
仙田ウキ云ヘアリ
山ノ誘野乃義ニ
ノヨリ
テ可見ヲ
ココノ
事也
乃心ヲ

渡 極 國方平見之賜
而冬木成 春去行者飛鳥
乃早御來 龍田道之
岳遊乃路尓 管士乃 將薫
時能 櫻花 將開
多頭能迎 桑出六 君之來益者
乃毛利 待苦麻左

ワカチカタリ 七道乃諸國ヲ従ヲカチヲヤラレ節度使ヲ
答テ乃 ヲシ送ヲヒ海ヲ山ヲ
カキワケ谷ヲ
軍師ヲ
ヲ拉ツヒ
ヲ
ヲ

敬 千萬乃軍 奈利交 言舉 不為
ウコクヲ
取而 可來 男 常曽 念
賜ヲ酒節度使卿等御歌一首并短歌

聖武天皇一云太上天皇

食國 遠 乃御朝廷尓 汝等之 如是
退 去者 平 久
將遊 手抱而 我者將御在
天皇 朕 宇頭乃御手 以 撲

小ヒ〻〻仙田ノウキ蹲躅シ
ヤヲヲヲ乃 ムヲヲヲヲヲ松浪シ
出ンヒ

又歌

ヲヲヲヲ乃軍 奈利交 言舉 不為
ウコクヲ乃ヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲ
取而 可來 男 常曽 念
賜ヲ酒節度使卿等御歌一首并短歌

聖武天皇一云太上天皇

退 去者 平 久
將遊 手抱而 我者將御在
天皇 朕 宇頭乃御手 以 撲

撫曽称宣賜打撫曽称
宣賜持還来日相飲
酒曽此豊御酒者
とけうこれとそみき

反歌

大夫之去跡去道曽凡可尓
ますらおのかくしもがもとこころなる
念而出立之伴
おもいくもなますらおの伴

中納言安倍廣庭卿
在久平好叙霊尅
欲為流
たつきのみちをなほしめすも

翌為管
短命乎長
たまきはるいのちをながくとよみてまつるきみのみよをながくとよみてまつる

五年癸酉越中国守時作歌二首

神社忌寸老麻呂

難波方潮干乃奈凝委曲見
在家妹之待将問多米
いへなるいもがまつらんとおもひつつなみのいとまをこぎてかへりぬ

直超乃此程尓師氏柳照哉
難波乃海跡名附家良思裳
なにはがたこえのほどにしをりてやなにはのうみとなづけけらしも

沉痾之時歌一首

山上憶良臣沉痾之時藤原朝臣

八束使河邊朝臣東人令問疾於是憶良
臣報語已畢有頃拭涙悲嘆口吟此歌

山上臣憶良

士也母空憶有萬代尓
いとあやにかもかもかくのみ
語續可名者不立イそを之而
かくのみしあへきものそ
與ト呂ニ姪家持從ニ佐保一還ニ歸ニ宅一

歌一首

大伴坂上郎女

吾背子我着衣薄佐保風者
わかせこかきるきぬうすさほかせは
疾莫吹及宅尓
いたくなふきそいへにとどかに

月歌一首

安倍朝臣蟲麻呂

雨隱三笠乃山平高御香裳
あまこもりみかさのやまをたかみかも

月乃不出來夜者更降管
月乃いてこぬよをもふけつつ

月歌三首

大伴坂上郎女

獵高乃高圓山平高弥鴨
かりたかのたかまとやまをたかみかも

出來月乃遲將光
いてくるつきのおそくてらはん

雨乃夜霧立而不清
あめのよきりのたちてすまさふ

照有月夜乃見者悲沂
てれるつきよのみれはかなしも

山葉尓左佐良榎壯士天原
やまのはにささらえおとこあまのはら

門度見良久之好藻
とわたるみらくしよしも

佐散良衣壯士月別名也童裏稱
さらえおとこ

月歌一首

豐前國娘子字曰大宅姓氏未詳

月乃

雲隠 去方平無跡吾戀
くもかくれゆくへもさらにわれこふる

月哉 君之覺 爲流
月をやも君がおもかげ

月歌二首 湯原王

天介座 月讀壯士 幣奈左 者將爲
あめなるや月よみおとこ幣はせん

今夜乃 長者 於左左 五百夜繼 許曽
こよひのながさ五百夜つぎこそ

愛也思 不遠里乃君來 跡
うるはしと思ふ君が里のきみこと

大熊備介 鴨 月之隈 有
おほくまのひなもと月のくまにある

月歌一首 藤原八束朝臣

待難介 余爲月者蛛之巢
まちがてにわがする月にいもりする

三笠山介隱而有來
みかさやまかくれてあれとも

宴禱又安貴王歌一首

市原王

春草者後者落易 叢成
春草のあとは散やすくむらなすと

常盤介座貴吾君
ときわにいませわがきみ

打酒歌一首

湯原王

燒刀之加度打放大夫之
やきたちのかどうちそなつますらをの

禱(イノル)の已(ヲ)豊酒介吾酔介家里
おくつきよみさされてありけるを
見(ミテ)二感(カナシ)岡(ヲカ)之松樹(マツノキ)一歌一首
紀朝臣鹿人(キノアソミカヒト)

感岡介神依備立而榮有
きけをかの神さびたてるえのきの
千代松乃樹乃歳之(ノ)久
ちよまつのきのとしのひさしく

至(イタリ)二泊瀬河邉一作歌一首
紀朝臣鹿人

石走(イハバシル)多藝千流留泊瀬河
いそはしるたきちるとまりはせかは
絶事無亦毛来而将見(ミム)
たゆることなくまたもきてみむ

詠(ヨメル)二元興寺(アスカノ)之里(サト)一歌一首

故郷之飛鳥者雖有
ふるさとのあすかはありと
平城之明日香乎見樂思好常
ならのあすかをみらくしよしも

初月歌一首
大伴坂上郎女

青丹吉
あをによし
日立而直(タチテスグ)三日月之眉根掻
ひたちてすぐみかつきのまよねかき
氣長(ケナガク)戀之(コヒシ)君介相有鴨
けながくこひしきみにあへるかも

三日月の歌一首
大伴坂上郎女

三(ミカ)日月之(ツキノ)眉根(マヨネ)掻(カキ)
みかつきのまよねかき
氣長(ケナガク)戀之(コヒシ)君介相有鴨
けながくこひしきみにあへるかも

童蒙抄云、おろき月の女の眉小やかなる月眉といひおくにはさまおろくにいふ也、素月ともいふ、二日三日の細き月をいふ、細き月の生ゆるといひ、人の眉根のやせたるにたとへ、欲まてゝ逢ぬれば眉根のかゆきといふ也、初月は生て後幾程もなきこと

於飛鳥地創之(ハジメ)日紀(シル)委
上宮太子討守屋(ウツ)時
蘇馬子又誓(チカヒ)營(イトナム)寺
とよみえたり釋書曰

初月歌一首

大伴宿祢家持

振仰而若月見者一目見之人乃眉引思容可聞

宴親族歌一首

大伴坂上郎女

如是為乍遊飲與草木尚春者生管秋者落去流時有驗天地之榮時念者

六年甲戌應詔歌一首

海犬養宿祢岡麻呂

御民吾生有驗天地之榮時念者

春三月幸難波宮之時歌六首

作者未詳

住吉乃粉濱之四時美開藻不見隠耳哉戀度

雲居尓所見阿波乃山懸而榜舟泊不知毛

遊覧住吉濵遷宮之時道上應詔作

遥うてゆるく唐なる
知らぬ国の女人ぞ
て後ぐさ居残る
されいれる如
後ろ髪を追
臨む海上これ山を云
他国ぬのらぬ
ちぬとりあるる
千沼回ふ沼の海乃
れ(ら)ん四津も
はぬ(ら)ぬ(ら)ぬ
もこふる縄
らんと

歌一首 守部王

従千沼廻雨曽雫来四八津之白泉郎
ちぬわたり漕ぐらむ
細手縄乾有沽将堪香聞
あてなるぞ
兒等之有者二人奥渚介
こらのたまくらを
鳴成多頭乃暁之聲
あぐなるがごとき

山部宿禰赤人

大夫者御猟尓立之未通女等者
赤裳須素引清濱備平
をすそひきさ

こらの袖
兒等は女ども
きそ
ひさて
演

安部朝臣豊嶋

馬之歩押止駐余佳吉之
うまれなみ
岸乃黄土
なよ

遥見海人釣船作歌一首

筑後守外従五位下葛井連大成

海藏嬬玉求良之奥浪
恐海介舩出為利所見
一首内匠寮大属鞍作村主益人

謌饗以饗長官佗為王未及
日斜王既還於時益人
之婦仍作此哥

鞍作村主益人

1003 1002

不預念 君乎 佐保河乃
おもほしきませる 君をさきくと 遥
河蝦 不令聞 都流香開
かはづ 聞かずて 恋ふるものを

八年丙子夏六月幸于芳野離宮
之時應詔作歌一首并短歌

山部宿祢赤人

八隅 知之 我大王之 見給
やすみしる わが大王の 見給
芳野 宮者 山高 雲 曽輕引
よしの宮は 山高み 雲 そたなびく
河 速弥湍之 聲 曽清寸 神
かは 早みたぎの 音 そさやけき 神
佐備而 見者 貴 久 宜
さびて 見れば たふと く よろし
名倍 見者 清 之 此山之
なへ 見れば さやけ く この山の

盡者耳 社 此河乃 絶者耳
つきばしの みこそ 山 この川の
社 能 百 師紀能 大 宮 所
こそ 上 百 敷きの 大宮 所
止 時 常 有目
やむ 時 なく あらめ

反歌

自神代 芳野 宮尓 蟻 通
かみよより よしの宮に あり通ひ
高 所知 者 山河乎 吉三
たかし らすは 山川を よみ

悲弖 獨子歌一首

悲しびて 獨子を歌ふ一首

市原王

言 不問 木 尚 妹與兄 有 哉平
こと 問はぬ 木すら 妹と せ あるかも
直 獨 子尓 有之 苦 者
ただ 独り 子にし あれば 苦しく は

本ハおほぶそてゆるみと
よめるし
緩 字彙云音奢遠也
又遲緩ヲ為緩ト
やまのはにいさよふ
いさよふハやすらふ也
上句ハ序にわかまち君
の來まつてまねといへ
ふんとそていふけめて
乃ふハ御字也
辭皇族之高名賜外家
之橘姓 これ續日本紀
にみゆる葛城王ハ敏
達帝の五代乃王孫也
聖武帝の天平八年十
一月に母方の橘氏を

恨ルヲ友ノ賖來ルヲ歌一首 忌部首黒麻呂

山之葉尓不知世経月乃将出香常 我待君之夜者更降管

やまのはにいさよふ月乃いてんかと
わかまつきみかよはふけにつゝ

冬十一月左大辨葛城王等賜姓橘氏之時御製歌一首 冬十一月九日從三位葛城王從四位上佐為王等辭皇族之高名賜外家之橘姓已訖於時太上天皇皇后共在于皇后宮以為肆宴而即御製賀橘之歌并賜御酒宿祢等也 或云此哥一首太上天皇御歌但天皇皇后御歌各有一首者其歌遺落未得採求焉

今檢案内八年十一月九日葛城王等願橘宿祢之姓上表以十七日依表乞賜橘宿祢者

天皇

橘 實左倍花左倍其葉左倍 枝尓霜雖降益常葉之樹

たちはなハみさへはなさへそのはさへ
えたにしもふれといやときハの木

あしん表をたまて此の
佐為王らも橘氏と改
續日本紀六日天平八年十一月
從三位葛城王從四位
佐為王等上表曰臣
葛城親母贈從一位
縣犬養橘宿祢上歷
淨御原朝庭下逮藤原大宮事君致命移孝為忠夙夜忘勞累代竭力
和銅元年十一月二十一日供奉舉國大嘗二十五日御宴天皇譽忠誠之至
賜浮杯之橘勅曰橘者果子之長上人之所好柯凌霜雪而繁茂葉經寒暑
而不彫與珠玉共競光交金銀以逾美是以汝姓者賜橘宿祢也而今
無繼嗣者恐失明詔上下畧こまかりこの橘姓あわりと表をなせり
同紀又曰壬辰 詔曰省從三位葛城王等表具知意趣王等情深謙讓
志在顯親辭皇族之高名請外家之橘姓尋思所執誠得時宜一依
表令賜橘宿祢千秌万歲相繼無窮
しるゝみしことく此童蒙抄にハみすとさくの本とるをますくの

欤しかうして日心心寺林良枝乃八以母校小哥をさゝげまつるとこゝろ
乃ほどを伝写乃ついでにあらはせるなり
寒暑不調とゐ乃ありてなりとて聖武帝乃時勅して
ちく山乃ときわかれて凌き
我背以前ゐ乃きいおひく
心奥山の雪波せ架乃
ちけきまゐれ出
ゐめやといつゝ但古
今集三夏の部ゐ乃きと
こゐる部ニ左乃きハ
わろ心ゝ
古歳漸晩 十二月十二日
唱此歌左の二首の哥
擬此趣ニ以心りへをりて
ちくくてと

應詔歌一首

橘宿祢奈良麻呂

奥山之真木葉凌 零雪乃
ちくく山乃ときわかれて架乃きこゑ
零者雖益 地介落月八方

ゐりハまするもにちかおちめやも

冬十二月十二日歌舞所之諸王臣
等集葛井連廣成家宴歌二首

葛井連廣成

比来古舞盛興古歳漸晩理宜共
盡古情同唱此歌故擬此趣輒獻

古曲二節風流意氣之士儻有此集
之中矣發念心和古體

我屋戸之梅咲有 跡告遣者
わろやとの梅さきちりさゝけやゝハ
来云 似有散 去十方吉
こてふりゆちりぬともよし
春去者平呼理介 乎呼里鷺之
ゐさゐをゐうぐひす
鳴吾嶋曽不息 逼為
ゐくわろちまうやまるすかよりせ

九年十五春正月橘少卿并諸大
夫等會二弾正尹門部王家宴歌二
首

主人門部王後賜姓大原真人也

来座武跡知麻世婆
ゐぬくちりまきみきのさんとたてしりせハ

門介屋ノ介毛珠敷益乎
かどこそ

橘宿禰文成即少卿之也

前日毛昨日毛今日毛雖見
さきつ日毛しきのみ見つれども

欲君香聞
明日左倍見巻ほすらへ君

後追和歌一首

榎井王

玉敷而待益欲利者多鶏蘇香仁
玉しきて待ましものはにけり

来有今夜四樂所念
きたる今夜しなくも

春二月諸大夫等集左少辨巨勢宿奈麻呂朝臣家宴歌一首

此一首書白紙懸著屋壁也題云蓬萊仙嬪所嚢藏為風流秀才之士矣斯乃客不所望見哉

作者未詳

海原遠渡平遊士之
うなはらを遠くわたりて遊士の

遊平將見登莫津左比曽來之
あそびせんとなつさひそこし

憂四月奉拝賀茂神社之時便超相坂山望見近江海而晩頭還來

作歌一首 大伴坂上郎女

木綿畳手向乃山平今日越而
ゆふたたみたむけの山を今日こえて

何時鹿越乃野邊介廬将為子等
いつしかこえの野辺にいほりせんこら

十年戊寅自嘆歌一首 元興寺之僧獨覺多智末

白玉ハ人にしられねと
旋頭歌也白玉を
みつから身に比して千
和の玉のことく人
に見しられねと我
した知れらはよしと
自得せしなるや

右一首聞衆諸狎侮因此
僧作此歌自嘆身才也

元興寺之僧

白珠者人尒不所知　不知友縦
しらたまハ人にしられすしらすともよし
雖不知吾之知有者不知友
しらすとも我しれらはしらすとも
任意
ことしり

配上左國　并

此頌出并なり此うた
いつあるゆへといふ諸
抄にしるさすよりて
此一書の口訣にて別
に記し侍し
いそのかみふるのみこと
ハ乙麻呂といふ人
乃こと也やうなり

配土左國之時歌三首并短歌

石上乙麻呂卿

石上振乃尊者弱女乃
惑尒縁而馬自物縄
取附肉自物弓笑
いそのかみふるのみことハたわやめの
まとひによりてむましもの縄
とりつけしゝしものゆみやかこミて

よめるなりや但万葉集ニ
石上乙麻呂卿配土左
國之時哥と有りて
ハ他人のよめるやうに
こそきこゆれひとり
此頌諸抄に沙汰せ
ましくて深き事なれは
と口訣ありすハ知人稀也

圍而　王命恐
かこミてそおほきミのミことかしこミ
天離　夷部尒退　古衣
あまさかるひなへにまかるふるころも
又打山従　還来奴香聞
またうち山よりかへりこぬかも

反歌

大王命恐見刺並之
おほきミのみことかしこミさしならふ
國尒出座耶　吾背乃公矣
くにゝいてますやわかせのきミを

定家卿さしならふ

るし椽るハ縄付る椽る
是ハ配所に趣り乙丸の
防されれのたまひのさまを云定家卿ハるかなりとも和かふるなり縄付と
志し椽る矢めてみて鹿ハ弓矢せしこと椽を配所に至し定家卿ハ志れかるなりと
おほきミのことかしこミ　王命恐ありてとさしひきへゆきのかハ配所よりさなし
かる衣またうち山　俗にまつちとらふハ又うちと云なりへハ配所に古衣ことかる
兼宗ハまつちらし山と和志のふ八雲抄にまつち山紀伊なりと土佐の配流の
おほきミのみこと　此女哥と女の傍るやうに小猿のなりや是云さしなりしハさしな

らぶし玉葉紀伊よりの渡津土左にくるまを　つみの十三首
次のあとつゝと一首ふたつ
けるかみ放和訓も異
心執望の人のつゝめ別譯ス
おけまくもゆしもかし
新玉ハそより一首住

繫巻嘗　湯ヶ石恐　石住　吉乃
荒人神　舩舳介　牛吐賜
村賜將　嶋崎前　枕賜將
礒崎前　荒浪　風介不合遇

吉と勉くおもふ云
ことを裏おもひ一首り
和て心をおもひくれとそ
吉ふくおもひて住ス
船乃へようとさき

草管見　身疾　不有　急
ことを管見ふ　やまひあらせて　す

乃へたゝかへしめそなへ
ひ先の舟ゆゑのやうにおもひ
けさあり　ハのさまく

令變　賜根　本國部介
ふるものまへは
レ磨乃舟のりと分ふ沖まの磯のさき
けきもくも風波の難もく皇病平安そて　すやふ沖まきと
金の心　管ふ子ハ和をけふりうやうふ病ふく　神乃加護ふと
ふのはし　ひまるこうの形を女介祓ふて住ふり　そまて一首の哥

まるこ見安云ことひまと
ふくふ　姚　玉篇曰母為
姚カ自　和名員俗作カ
自劉向列女傳曰古語老
母為員云ニ愛子之貌
まうのふり　仙同まうて
のふりとふまうのふりより
リこの坂　大和日本紀
八遺紀臣大音令守懼
坂道ニ是也心ハ八十氏人
まうのふりてる向ふと
リこまる事の叩こ坂ふりぬさゝそまうりて船と土を乃ほをもい
ゆくとも土左日記小豪ほ乃ほをもりんそてこき出ふりこゐるお同
おふりまさの神乃をゐ八中和土左とふく名高光後哥ふ振神の
小濱ふ舟よせく大嶋これ月のさわけさ哥の心ハ小濱狭れと
百乃舟人も皆舟よするとこてまる船ふ土をよ乃ふまと

父公介　吾者真名子叙　姚　刀自介
吾者愛ふ子叙　糸　昼ふの乃八十氏　人　乃
手向　為等　恐　乃坂介　幣　奉　吾
者叙　追　桙土左　道矣ふ豪ゐ
遠　とをきふとふる

反歌

大　嵜乃神之　小濵　者　雖小
百　船　純毛　過　逕　玄莫國
おふりまこ乃神ゐとふくせふれと
ふまひことすくとゐふまは
ゆくとも土左日記小豪ほ乃ほをもりんそてこき出ふりこゐるお同
おふりまさの神乃をゐ八中和土左とふく名高光後哥ふ振神の
小濱ふ舟よせく大嶋これ月のさわけさ哥の心ハ小濱狭れと
百乃舟人も皆舟よするとこてまる船ふ土をよ乃ふまと

右大臣橘家 諸兄公也
萬葉王之 續日本紀
十三日天平十年正月壬午諸兄授正三位拜右大臣
ありこちるおまの
奥は借語八字おかしなりの
おもしろくおもしろくて
そしおきまして
おもふ
おもふ
沖を漕めてゆくと
同じ二首ともに
酒のみを讃る歌
おまして
わせこのもちきしを
よきかと祝るなる
百まてと祝ぬ

秋八月二十日宴右大臣橘家歌四首

長門守巨曽倍對馬朝臣

長門 有 奥津 借鳴 奥 真經而
ありとある おきつかもとよ おきまして
吾 念 君 有 千歳 介母 我毛
わりおのふきみをちとせ

和歌

右大臣

奥 真經而 吾平 念流 吾 背子者
おきまして わをらるるろせこそ
千歳 五百 歳 有 巨勢 如 香聞
ちとせいろせのかもこせぬ

豊鳴采女イ故豊鳴采女

百 磯城乃 大 宮 人者 今日 毛鴨
もきのおおみやひとも
眼 無 跡里 介 不去 將有
いとまもあるとさとかゆりさん

日本紀一云保寿掛号千頭日ふ小殺まんこのうよ任妊諸号さ仍ハ千ゆう(ある
ひといとうう(生んとのうる心りかうつまやをこせぬもこハをまうう(この心
うきさりかうみやひとハふれりふいるまりけまと大伴の家乃宴小まをも
せうこの心りや里ふゆうう(ここうう(まうこの心まや百なの大きる人いるあ
なまる橘うまうてうふも等り

豊鳴采女

本 介道履 八 衢 介
もちてなのりてもちてしるみやもちもの
物 平曽 念 人 介不放知
ものをうおりよひうよもうまうと

右一首右大辨高橋安麻呂卿諺云故豊鳴采女之作也但或本云三方沙弥戀妻苑臣作歌也然則豊鳴采女當時當所口吟此歌歟

十一年己卯天皇遊獵高圓野之時小獣池走堵里之中於是適値高圓野之

勇士ニ生而見レ獲即以ニ此獸一獻ニ上御
在所一副ニ歌一首 未レ考而小獸死
驚レ因レ此獻レ歌儀ヘレ之

大伴坂上郎女

高圓山介有ニ迫者
大夫之 弓上乎 取持而 射伏跡 白鹿乃
立介下 來流 年射伏跡 此

年射伏跡獸名也

十二年庚辰冬十月依ニ太宰少
貳藤原朝臣廣嗣謀反一發軍幸
于伊勢國一之時河口行宮作歌
一首

内舍人大伴宿祢家持

河口之野邊介廬而夜乃歷者
かしこきや 天皇乃 御命恐美 妹之手本
いとりつるかも 所念鴨

七年人委ニ東人等一持節
詔之冬十月己卯勅大
將軍大野朝臣東人等
曰朕縁ニ有所一レ意今月
之末暫往ニ關東一雖ニ非其時一事不レ能レ已將軍知之不須驚怖壬午行幸
伊勢國一乙酉到ニ伊勢國壹志郡河口頓宮一謂之關宮一十一月戊子大
將軍東人等言以ニ今月一日於ニ肥前國松浦郡一斬ニ廣嗣縄手一已訖廣
嗣式部卿長養之弟一之子也

一首 天皇御製

妹介戀 吾乃松原 見渡者
潮干乃滷介多頭鳴 渡

去河口行宮遠矣若疑御在朝明行宮之時所製衣御歌傳者誤之歟

一首　丹比屋主真人

後人之思泥能塙木綿取之泥而將住跡其念

案此歌者不有此行宮之作乎所以然言勅大夫從河口行宮深凌仞令從駕焉何有詠思泥塙作歌哉

狹殘行宮作歌二首

大伴宿祢家持

天皇之行幸之隨吾妹子之手扶不巻月曽歷去家留

小舩余衆而奥部榜所見

義濃國多藝行宮作歌二首

大伴宿祢東人

從古人之言來老人之

變若云水曽名余負滝之瀬

大伴宿祢家持

田跡河之瀧乎清叡香從古

志麻乃海部有之真能野之

御食國志麻乃海部有之真熊野之

すめろきの神の御代もかくしこそ

すめろきの神の御代もかくしこそ

みそつ玉藻も潮部乃益

志麻乃海人乃益荒雄乃

加潜出来

紀列乃船師の舟

のりゆくを見

義濃國多藝行宮

續日本紀七日元正天皇養老元年

八月丙辰幸當耆郡多度山美泉二十一月癸丑天

皇詔曰賢當耆郡多度山美泉自盥手面

皮膚滑洗痛處
無不除愈在朕之躬
其驗又就而飲浴之
者或白髮反黑類髮
更生或眉目如明自
餘痼疾咸皆平愈昔
聞後漢光武時醴泉
出飲之者痼疾平愈
符瑞書曰醴泉者美泉可以養老蓋水之精也寔惟美泉即合大瑞朕
雖眇虛何違天貺可大赦天下改靈龜三年爲養老元年（下略）

宮仕兼多藝乃野之上
みやたちくらんーこれのへに
不破行宮作歌一首

大伴宿祢家持

國無者遥尓谷蘇打行而
せきもるくにはうちゆきて
妹之手枕巻手宿益乎
いもがてまくらまきてねやまし

右大臣橘宿祢諸兄在前而發經
畧山背國相樂郡恭仁鄉以擬遷都故也
丁卯皇帝在前幸恭仁宮始作京都矣大
上天皇在後

久邇京賀茂の新宅
續日本紀十三曰天平十二年十二月
戊午是日右大臣橘宿祢諸兄在前而發經畧山背國相樂郡恭仁鄉以擬遷都故也
丁卯皇帝在前幸恭仁宮始作京都矣大上天皇在後

妹と柘榴とはこれ
美濃國不破行宮留連數月とあるはのちまく帝乃侍奉の折ならん

久邇京
續日本紀十三曰天平十二年十二月
戊午是日右大臣橘宿祢諸兄在前而發經畧山背國相樂郡恭仁鄉以擬遷都故也
丁卯皇帝在前幸恭仁宮始作京都矣大上天皇在後

十五年癸未秋八月十六日讃久邇京（ホメテ クニノ ミヤヲ）

作歌一首

内舍人大伴宿祢家持

今造久尓乃王都者山河之
いまつくる久尓乃王都者山河之
清見者宇倍所知良之
きよくみはうへしらしつ

二首

高丘河内連

故郷者遠毛不有一重山
ふるさとはとをもあらずひとへやま
越我可良尓念曽吾世思
こゆるわからにおもそわがせし

吾背子與二人之居者山高
わがせこよふたりしをれば山たかみ

里尓者月波不曜雲方余恩
さとりはつきてすらも
安積親王宴左少辨藤原八束朝臣
之日作歌一首
内舍人大伴宿禰家持
久堅乃雨者零敷念子之
屋戸尓今夜者明而将去
ひさかたのあめはふりしきおもふこが
やどによはしてゆかん
十六年甲申春正月五日諸卿大夫等
集安倍蟲麻呂朝臣家宴歌一首
作者未詳
吾屋戸乃君松樹尓零雪之
わがやどのきみまつのきにふるゆきの

行者不去待西将待
ゆきもかへらずまちもこん
正月十一日登活道岡集一株松下
飲歌一首
松幾代可歴流吹風
ひとむらのまつのいくよをへぬるかも
聲之清者年深香聞
こゑのきよきはとしのふかきかも
大伴宿禰家持
靈寿者不知松之枝
いのちはしらずまつのえだを
結情者長等念
むすぶこころはながくとおもふ
攀折者千歳可経
をりてはちとせをへぬべし
賜宴宅作歌三首
作者未詳

松が枝を折りて挿頭しつ
よろづ代にかはらざるべき心もがな
千年の春の始めにかくしつつ
もとの始めに
今生にいかにかしてか
今生にいかにかしてか
定期はてにてまた逢ひてまつらむ

紅深淵西情可毋
紅深淵西情可毋

介深淵西情可毋

寧樂乃京介与之歷去倍吉

世間無物跡今曽知

平城京師之秋徒見者

石綱乃又變若反青丹吉

奈良乃都丹又鴨

将見

木晩牟久奴婢鳥者の間無數鳴
こノゆふへもかなかハなくに
露霜乃秋去来者射駒山
飛火賀堀冊草乃枝乎辛見散之
狭男鹿者妻呼令動候山見
山常見狭石里見者里裳住吉
物負之八十伴緒乃打経而
思敷者天地乃依會限
萬世冊榮將来迹思煎石
大宮尚矣特有之名良乃京
新世乃事尓之有者皇
矣

引乃真尓真荷春花乃遷
日易村鳥乃旦立往者
刺竹大宮人能踏平之
通之道馬蹤不打
徃冥者花尓異類香聞

三笠を飛火とする歟
童蒙抄云昔唐は軍せに大なるいねを山海
よりて軍なきわれハ次第に火をとりて
一月かゝり往れど一日
にとゞまると烽燧と云ことみち
鹿乃苑を
押伏る柵のやうなるもの
山もとよりかゝり景色あしき所
なりひまあみたてハ思無數
山もとよりかゝり景色あしき所の春秋ともに
なく山にてもなく
平地にてもなく実てハさしもなけれ
ども
なをやすからぬ心ありて
なをやすからぬ心ありて
叫るハ帝の
春花、うつろひの秋河
春花、うつろひの秋河
巳巫始遷平城詔伏奉置於恭仁宮初壊平城大極殿及歩廊遷造於恭仁宮

反歌

立易古京路成

ちはやふる神の御代より

生尓異利

道之志婆草長

みちの辺の草深百合の

名付西奈良乃京之

荒行者

なほきよき心もあれや

出立毎尓嘆

思益

うつくしと言ひし言の

讃久邇新京歌二首并短歌

（ママ）

（ママ）

田邊福麻呂

明津神吾皇

天下

八嶋之中尓國者

霜

多（ママ）

雖有

山代乃鹿背山際尓宮柱

太敷奉

高知為

布當乃宮

者河迩見

湍音叙清

山迩見

鳥賀鳴慟

秋去者山裳動響尓

虫名集

春

吉者

花開

平伴理

岡邊叙繁尓

巖

者

甚貴

布當乃原

大宮處

諾

己曽

吾大王

者

君之隨

所聞

賜

而

刺竹乃

之立合郷跡川並之立合郷跡

里者霜

雖有

山並

之宮

國跡川並之立合郷跡

里者霜

雖有

山並

之宮

ありようにまつりつひて
王者乃清平ニに方す
をきき世ニて口さ聖武
天皇をトもちて
千ろ乃ろ〻ゝ千ろのの
皆山城乃名ゆきき
よゝこゝろいはゝとそき
うろの空
やゝまこゝろ〻ゝのせ
空と神と帝をトも
千ゆろんハ千ゆきちん心百世まゝも帝王乃初幸行んと祝る心
わろき千の神乃ことを
空も帝を神の千こと
空ト帝ト是示給ふ
ろゝおもす ゆゝの
ゆ乃生ちする心

大宮 此跡 定 異等霜

反歌

三日原 布當乃野邊 清見社
千ろ乃ろ〻ゝふゝいろ乃のへをきよろ千ころ
大宮 處 定 異等霜こゝゆゝまめさん
おろゝゝやゝこゝろさゝめろゝも
弓ゐを 高來 川 乃淵 清石 百世 左右
やゝのゝろゝゝろ乃せきろゝこゝもよゆまて
神之味 將往 大宮 哥
ゆ千の空ゆろんおゝ千やゝこゝろ

吾 皇 神乃 余 乃 高 哥知
わろき千の神乃ろゝもゝゝ
布當乃宮者 百樹 成イなゝ 山者木高之
ろゝゝいろゝやゝゝろゝおもす山ゝゝろ
落 多藝都 湍音毛 清之 鷺乃 來
おちゝゝゆろせをもきろ 營ゝ き

世をゝゝゝゝ 此のろ
ゆきゝろす ゝこ
千ゝさろす 空の跡
ことゝゝ心
ろゝゆきろゆゝ
乃千ちゝゝやゝ小雪ゝこ
さふゝふ 袖おろさ包
ると同一さゝサ義也
詞林采葉三ゆゝこ
ろゝこゝハおゆをゝ
つきゝゝくろろ
やちこせふあれつゝゝ
八千世ももうちてさゝこ續日本紀十四日天平十三年十一月右大臣橘諸兄奏此間
朝庭以何名号傳於万代天皇勅曰号為大養徳恭仁宮也

鳴 春部者 巖 山下 耀 錦
ゆくゝゝハゝゝ山ゝこひりかふ
成 花咲 乎呼里 尤牡 鹿乃妻
ゝゝ秋ハろゝゝゝゝさゝゝれをゝやゝ
呼秋者 天 霧 合 之具礼 乎 疾
よふ秋ハろゝゝゝゝゝ
狹丹頬 歷 黃 葉 散乍 八千年 尒
さゝゝゝふゝゝ千ちゝゝふ
安礼 衝 之 作
ろれつゝゝゝゝあゝれゝゝ
食 跡 百代尒 母 天 知
ゝゝんとゝよふゝゝゝゝぬ
大宮 處
おゝ千やゝこゝろ

反歌

万代 天皇勅曰号為大養徳恭仁宮也

河 往 瀬乃水之 絶 者許 胥
いにしへみやこ 大宮地 遷 往日
おもほゆるかも 布當山山並見者百代亦毛
かはらざるべし 大不可易
城嬬等之續麻繁 云 鹿背之山
ときはなす 京師 跡成宿
時之往去 鹿脊之山樹立矣繁三朝不去
すめらぎの 為鸞之音
きこしめすなり 貊山亦鳴霍公鳥泉河
こきばやて 渡平遠見此間亦不通
わたりをとをみ

渡 遠哉不通者武
一云わたりをとをみやかなすいあんん

悲傷三香原荒墟作歌一首并短歌

田邊福麻呂

三香原 久迹乃京師者山高 河
ちのみの 之瀬清 在吉迹 人者雖一云
よどみもせず 在吉跡 吾者雖念
ありよしと われはおもへど 故去之
里見 亦四有者國見 跡 人毛不一通
さとみられ 家裳荒 有 波之異耶之
里見者 如此在 家留可 三諸著
くあるべく 鹿脊山際亦
さくらばな 開 花之色目列 敷
さかえをめつつ 百鳥之

物心 山傳之 思 名
てく迹宮 云 一云もののふの

悲傷三香原荒墟ノ
續日本紀十五日天平十六年
正月朔詔喚會於朝堂
同恭仁難波二京何定為
都 乙亥天皇行幸難波
宮二月乙未取恭仁宮驛
鈴内外印及諸司
朝集使等於難波宮
庚申左大臣宣勅云今
以難波宮定為皇都宣
知此城京戸百姓任意
往來 云々

柚中抄三

音名東敷 在景石住吉
里乃荒 樂苦惜 要
さゝらのれらくおも

反歌

三香原 久迹乃京者荒去家里
みつのゝ遷 去礼者
大宮人乃遷去礼者
咲花乃 色者不易 百石城乃
大宮人叙立 易去派
おおみやひとそたつ

難波宮作歌一首并短歌

田邊福麻呂

安見知之 吾 大王乃在通
やすみしる わ おほきみの あり

名庭乃宮者不知魚取 海片就而
おほにはの みやは しらなゝとり うみをかたつきて
玉拾 濱遊乎 迩見朝 羽振
たまひろふ はまあそびを ちかみあさ はふる
鶴之聲 躁夕 蘆卅 櫂合之聲所聞
たづのこゑ さわく ゆふべ あしべ かいあはせ おとのきこゆる
波乃音之 曉 寐覺介聞者 海石之
なみのおと あかとき ねざめにきけば うみいはの
鹽干乃共 納渚尓波 千鳥妻呼
しほひのむた なぎさには ちどりつまよび
葭部尓波 鶴鳴動
あしべには たづなきとよむ
語 卅為 者聞人之視巻 欲為
かたり せむ ひとの みまく ほりせむ
御食向 味原宮者雖見不飽
みけむかふ あぢふのみやは みれどあかぬ
香聞
かも

反歌

1063 1064 1065 1066 1067

見安云 難波乃
ありかよふなにはの宮ハ
ちかみありかよふ宮ハ海
のちかくにありて也
しほひにはあしへにつるかり
なくこゑも宮にきこゆる心
しほかれにあしへにさわく
たつも宮にとよむ也
やちほこの神代
仙云 國作大己貴命の
一名也 見日本紀第一二
見安同 百船泊き也
やしまくに 大八洲の事也
あさなき 月本云
但これは敏馬の浦也
みぬめの浦 津の国也

有通 難波乃宮者 海近見 漁童女等之 乗船所見
ありかよふなにはの宮ハうみちかみあまおとめらかのれるふねみゆ

鹽干者 葦邊尓躁 白鶴乃 妻呼音者 宮毛動響二
しほひれはあしへにさわくしらたつのつまよふこゑは宮もとゝろに

過敏馬時作歌一首并短歌

田邊福麻呂

八千桙之 神乃御世自 百船之 泊停跡 八嶋國 百船純乃 定而師 三犬女乃浦者 朝風尓 浦浪左和寸 夕浪尓 玉藻者來依
やちほこの神のみよゝりもゝふねのはつるとまりとやしまくにもゝふなひとのさためてしみぬめのうらはあさかせにうらなみさわきゆふなみにたまもはきよる

白砂 清濱部者 去還 雖見不飽 諸石社 見人毎尓 語嗣 偲家良思吉 百世歴而 所偲将徃 清白濱
しらまさこきよきはまへはゆきかへりみれともあかすうへしこそみる人ことにかたりつきしのひけらしきもゝよへてしのはれゆかんきよきしらはま

しのひつゝきき
きこえ助字之 おもほゆる
らうきと思ひ月し
しのふとしのふ也
清白濱 敏馬の景色也
ますかゝみみぬめの
祇曰ますかゝみ二ハ見ぬ
め乃發語の句也 百目
ま名ハあまたある
ゆくへき濱ならぬ也
はまきよみうらうる
神世よりちふねの
おほわたの濱 摂津也

反歌

真十鏡 見宿女乃浦者 百船 過而可徃 濱有七國
ますかゝみみぬめのうらはもゝふねのすきてゆくへきはまならなくに

濱清 浦愛見 神世自 千船湊 大和太乃濱
はまきよみうらうるはしみかみよゝりちふねのはつるおほわたのはま

貞享二年八月六日染
筆於新玉津嶋而同此
七月終此一巻平

萬葉集巻第六終